

「玉ねぎ魚」現象とドイツ語の新正書法について

Gudrun GRAEWE

Abstract

Im Jahr 2004 wurde in Deutschland ein Buch mit dem Titel “Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod” zum Bestseller. Es ist keine systematische Sprachbetrachtung, sondern eine Kolumnensammlung. Die sogenannten „Zwiebelfisch“ – Kolumnen behandeln beispielsweise Interpunktion, den korrekten Plural, guten Stil im Deutschen, Zweifelsfälle und andere das deutsche Sprachgefühl betreffende Themen. Warum erlangte das Buch sowie sein Nachfolgebund solche Popularität? Dieses Phänomen, das von einem neuen Sprachbewusstsein zeugt, wird hier in Zusammenhang mit der deutschen Rechtschreibreform untersucht.

Keywords: ドイツ語の新正書法, Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod, Zwiebelfisch-Kolumne, Rechtschreibreform

はじめに

ドイツでは2004年からある本がベストセラーになった。スイスのベストセラーのランキングにも入っていた。それは小説ではなく、タイトルを読めば多少は予想できるが、簡単に言えばドイツ語の使い方についての実用書である。2005年に続編が出版されて、これもたちまちベストセラーになった。2冊とも現代ドイツ語のさまざまな実情を知ることができる興味深いものである。ここでは、これらの本を紹介したい。そしてなぜこの2冊の本がこれほど人気の的となって売れるようになったのか、言語意識にどのような変化が現れるのか、ドイツ人のドイツ語に対する忠誠はどのようなものなのか、ドイツ語の新正書法は言語意識にどのような影響を及ぼしたか、などについて論じたいと思う。つまりこの2冊の本や新正書法・言語意識を関連づけたい。そのために、新正書法の改革の成り行きや結果についても述べる。

初巻は2004年8月に出版されてから、現在2005年末までに例えばドイツ・チュービンゲンにあるオジアンダー（Osiander）という本屋で、文学作品を含むベストセラーリストの第4位にランクされ、2005年には、ザールラント州の学校で公認の教科書としても使われた¹⁾。2005年8月に、続編が出版され、それも売れるようになった。

いずれも手頃なペーパーバックで、そして8,90ユーロという値段もセールスポイントになるだろうが、それよりもテーマが多く読者の興味を引いたと言えよう。

著者はBastian Sick（バスティアン・シック）という、校正担当者・翻訳者・ジャーナリスト

の経歴をもつコラムニストであり、ドイツの週刊誌 Der Spiegel のオンライン・バージョンである SPIEGEL ONLINE のために、コラムを書いている。そのコラムは Zwiebfisch (玉ねぎ魚) という可愛らしい名前をもっている。玉ねぎ魚はブリークという、コイ科の実際にある魚である²⁾。しかしこのコラムのタイトルは魚とは関係がない。Zwiebfisch には、印刷ミス of 「ごっちゃ混ぜの活字」という、もう一つの比喩的な意味がある。印刷ミスによって混同された文字 (活字タイプ) を泳ぎ乱れている魚に見立てた隠喩である (たまねぎと一緒に料理する雑魚の意味からきたという説もある³⁾)。このコラムでは活字の乱れではないが、ドイツ語の様々な乱れがテーマになっているので、この名前がつけられたらいい。シックはこの名が付いたコラムで、ドイツ語という言語の難しい規定を理解しやすく説明し、スペル・表現・スタイル・文法・句読点などにおけるよく起こる誤りを明らかにしている。

この週刊であるオンライン・コラムは読者に大きな反響があったため、その連載中の個々の記事が本にまとめられることになったのである。

タイトルの説明

第1巻も第2巻もタイトルは同じく Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod である。そのタイトルの意味も文構造も本の内容を指摘している。直訳すると「3格は2格の死である」という。その意味は「3格は2格の死因である」または「3格は2格の死をもたらしている」ということになるだろう。Dem Genitiv sein というのは「2格の」を意味しているが、その際、普通は正しいドイツ語を使って des Genitivs と、2格を利用しなければならない。Dem Genitiv sein という構造は古高ドイツ語から由来するらしく、ドイツ南部の口語表現では普段使われているが、筆記上では正しいドイツ語ではない。Dem は der という定冠詞の3格、sein は、前の Genitiv という名詞を受ける所有冠詞である。Dativ は与格、Genitiv は属格・所有格であるので、「2格の」というのは des Genitivs という2格の形で言うべきであるのに、このところで3格が使われていることから、2格の存在は実際に危なく、いかに2格が現代ドイツ語から消えつつあるか、ということが分かる。タイトルそのものがタイトルの意味の証明にもなっていると言われるように、この本がドイツ語の使い方における乱れを指摘しようとする意図がうかがわれる。

第1巻のサブタイトルは Ein Wegweiser durch den Irrgarten der deutschen Sprache (ドイツ語の迷路案内) である。第2巻は Neues aus dem Irrgarten der deutschen Sprache (ドイツ語の迷路からの最新情報) となっている。ドイツ語を迷路にたとえることは、ドイツ語の難しさやその規則の複雑性を示唆している。「迷路」であるので、ドイツ語の使い方における乱れが現れるのは驚くことではない。そしてこの2冊の本はドイツ語の正しい使い方へと案内しようとしている。

第2巻の中の出版社の宣伝文には、次のように書かれている。「今日まで100万冊以上が売られた初巻で、バステリアン・シックはひとつの小さな奇跡を起こした。突然、多くの方は句読点、正しい複数やドイツ語のいいスタイルについて読み始めたと同時に、自分の言語感覚にまた自信を持つようになった。なぜ、この著作がこれほど人気をよび、大成功を収めたのか。ただの偶然ではないと考えられる。ドイツ語圏におけるドイツ語に対する言語意識になぜ、どのような変化があったのだろうか。ここではその現象の理由、その必要条件を探る前に、この二冊

の構成や内容について触れたい。

この2冊の構成

この2冊の本は秩序立った教科書でもなく、学術的な、体系のあるものでもない。個々の章が任意に並べられているだけである。完全性に関する要求もない。最初から順番に読み進むというより、一章ずつでも、本の中央からでも読み出すのは可能であり、読者に裁量が与えられている。それぞれの章は比較的短く、第1巻は37章、第2巻は76章ある。いくつかの章には便利な表も付いている。例えば、過去分詞がよく間違えられる不規則変化動詞リスト⁴⁾・色彩名の形容詞リスト⁵⁾・ことわざとその説明のリスト⁶⁾などがある。基本的に、第2巻も第1巻と同じ構造であるが、前作と異なって、読者とのQ&Aがつけてある。様々な質問に、著者は「たまねぎ魚の答え」を付け加える。もう一つ異なるところは、60問の「たまねぎテスト」(Wie gut ist Ihr Deutsch? あなたのドイツ語はどのレベルなのか)である。そして単語を検索できるように、インデックスが付いている。それが第1巻にはないのは、多少残念である。そのかわりに第1巻の最後に、Das kleine Abc des Zwiebelfischs (たまねぎ魚の小さなABC)という、アルファベット順で60ぐらいの検索語の短い説明が添付されている。

この2冊の著作の重要な特徴は読みやすく面白い、ユーモアや機知に富んだ、軽妙な文体である。例えば過去分詞に関する誤りを取り上げる章では、誤った過去分詞がストーリー仕立てで紹介されている。

ドイツ語についてのこのような独創性のある本は今日までになかったと言えよう。著者シックは皮肉もいかして正直に、そしてさり気なく感想を述べている。退屈感が沸いてこないだけでなく、楽しめる本であると言ってもいい。このようにベストセラーになっただけではなく、シックは現在、ドイツ語のもっとも有名な言語保護者になったといわれている。

内容について

この2冊は既に述べたように、個々の章が関連しておらず、また連続性や体系のあるものではないので、順番にそって内容を全体としてまとめながら、紹介しても意味がないと思う。そのかわりに、例をあげながら、多少の問題点も含めて、いくつかの対象となったテーマを取り上げて系統立てて概要を述べてみたい。

シックは「言葉が乱れている」とは非難しない。むしろ、ユーモアをもってドイツ語の使い方における不注意やいい加減さを浮き彫りにしている。彼はいわゆる「言葉のごみ」を仕分けしようとしている。しかし、シックはたしなめたり非難したりしない。シックはドイツ語の使い方における問題は、人間の無頓着から由来するというより、言葉そのものの中に、その規則などの中にひそんでいる、とでも主張したいのだろう。シックは迷路という比喻を使ってドイツ語の難しさを強調している。ドイツ語の規則をうまく使いこなすのは非常に困難なので、誤りが起こりやすい。疑わしいケースも多数ある故に、困惑することもあるだろう。シックはこのような、混乱を招く規則に焦点を当てようとしている。

いくつかの章に取り上げられているテーマにドイツ語と他の外国語との関係についてのものがある。例えば借用語の複数形を作るときに、多くの誤りが起こる。例えば「ビザ」Visaというラテン語から由来した言葉は既に複数であるのに、さらに複数の「s」をつけてVisasとする誤りがよくある。シックによると、外来語の扱いはドイツ語を話す人にとって非常に難しい。なぜなら、その意味と発音だけではなく、変化・複数形も分らないと、正しく使うことができないからである⁷⁾。また、「趣味」Hobbyという英語からの借用語の複数形をHobbiesと書く人がいる。英語では正しいが、ドイツ語の場合は「s」だけをつけてHobbysと書くのが正解である。さらに、英語のつもりでドイツ語が作り出した「携帯電話」Handyに英語の規則を当てはめて、複数にHandiesと書く宣伝などが見られる。英語で、「リュック」rucksackや「焼きソーセージ」bratwurstなどの複数形は、ドイツ語のルールを当てはめてrucksaecke, bratwuersteではなく、rucksacks, bratwurstsなどという英語風の複数形になるのと同様に、シックは外来語にはドイツ語の複数形の語尾をつけるように主張している。ドイツ語圏の人は、英語圏の人がドイツ語の外来語をドイツ語風に語形変化するのを期待していないので、英語からの外来語もドイツ語風に使うべきであるとしている⁸⁾。

なお、最近英語のきまり文句をそのまま言葉通りドイツ語に訳して使うことが多い。例えば「それは意味がある」That makes sense.をこれまでのDas ist sinnvoll.というより、Das macht Sinn.に直訳して、よく使われるが、シックにとっては、それはスタイルの悪いドイツ語である⁹⁾。また、アメリカの国防長官ラムスフェルトの文句I can't remember that.はIch kann das nicht erinnern.という風に訳された。それはドイツ語のように聞こえるが、構造はドイツ語ではない。正しいドイツ語ではIch kann mich nicht daran erinnern.と言うべきである。シックはこのようにいくつかのドイツ語の中に潜り込んだ英語風やアメリカ語風の慣用語を取り上げている¹⁰⁾。

最近、多くの英語の動詞がドイツ語で使われるようになった。たとえばto recycle, to mail, to cancel, to chatなどはrecyceln, mailen, canceln, chattenになった。その中にはドイツ語でうまく動詞変化できる、うまくドイツ語に取り入れられる動詞もあるが、ドイツ語訳があれば、それを使うように、とシックは要求している。例えばdownloadは現在完了でdowngeloadetというかgedownloadetというか、という質問に、シックは、ドイツ語でheruntergeladenを使うように助言している¹¹⁾。

シックはさらに英語風の言葉に注目する。特に販売を促進するために、商品は英語で名づけられることが多い。「携帯電話」Handyということばはまだ無害であるが、リュックサックのようなものをbody bagという名前で売ろうとすると、気まずいことにほかならない。なぜかという、body bagという英語の元来の意味は戦争で使う死体用の袋だからである¹²⁾。

シックはインターネットやニュースなどにみられる様々なドイツ語上の誤りについて苦言を呈する。例えば形容詞・副詞の比較変化させられない言葉が無理やりに比較変化させられる。「最上のサービス」はoptimaler Serviceでいいのに、optimalerをさらに「最も最上」optimalsterというふうに比較変化させることがある。optimalはもう「最上」なので、さらに最上級にすることはできないのだ¹³⁾。

そして、殆ど誰も気づかないほどよく起こる誤りは、例えば「今年の夏」im Sommer diesen Jahresである。「去年の夏」の場合はletztが形容詞であるからim Sommer letzten Jahresとなる

が、「今年の」の場合は *dieser* が指示代名詞なのでその2格の *dieses* にしなければならない¹⁴⁾。

また、言葉の正しい使い分けも守られていない。 *anscheinend* 「・・・らしく見える(がどうやらそれは本当でもあるようだ)」と *scheinbar* 「・・・らしく見える(が実はそうではない)」を区別できない場合が多いとされている¹⁵⁾。

さらに、シックは句読点に関する誤りも忠告している。例えばまったく必要でないところにアポストロフィが現れる。「オーストラリアのカンガルーたち」は *Australien's Känguru's* になってしまうことがある。そして複合語はつないで書いてもいいのに、ハイフンで結ばれることが多い。このように、シックは様々な誤りや矛盾を指摘している。例をあげれば、名詞の格変化がなくなったり、強変化動詞の過去分詞が弱変化されたり、そして本のタイトルが示しているように、格の混同が起こったりすることもある。

これらのケースは明らかに誤りであるので、読者は納得すると思われるが、いくつかの章では、シックの論証は客観性に欠けている細かすぎる詮索のように思われる部分がある。シックは所々、自分のセンスを主張しすぎたり、文に対して過敏になりすぎたりすることもある。決まりきった文句・手垢の付いた言い回しや同意語を使いすぎる、大災害や破滅に典型的な言い回しにこだわるジャーナリストたちが批判されている。例えば「建物はトランプの家のごとく崩れる」 *Gebäude fallen wie Kartenhäuser in sich zusammen* などというありふれた文句はシックにとって、冗長すぎるだけではなく、美辞麗句を弄することなのである¹⁶⁾。たしかに決まり文句を並べることはよくないだろうが、このような意見はシック個人の好みにすぎないとも考えられる。

もうひとつの問題点は、シックの論調が時として程度を越していることである。シックは新聞から次の文を挙げている。(*Gerüchte, er habe ein homosexuelles Verhältnis mit dem Justizsenator, wollte der Bürgermeister nicht kommentieren.*) 「市長は、自分と法務大臣との間の同性愛関係のうわさについて、ノーコメントだった」の場合、それはひとつのうわさ (*Gerücht*) にすぎないのに、ここでは複数の *Gerüchte* が書いてある¹⁷⁾。それはシックにとって矛盾であるが、一般的にこの文を読めば、多くの人はこの矛盾に気づかないだろう。シックはこのような細かいケースに対して敏感すぎるであろうし、この論証は普通の言語感覚の者を混乱させる可能性もあるだろう。シックは所々自分の言葉の趣味を読者に押し付けると言っても言い過ぎではないだろう。

第2巻も第1巻と同様に、ドイツ語によく起こる様々な誤りをとりあげているが、第1巻と異なって、誤りと関係なく、読者からのいくつかの質問に対する玉ねぎ魚 (シック) の答えも記載されている。なぜ、「土曜日」はドイツ語で *Samstag* や *Sonnabend* というふたつの言葉があるか¹⁸⁾、パリの「東駅」 *Gare de l'Est* について話す場合、 *der Gare* か *die Gare* にすべきか¹⁹⁾ などという質問がある。また、シックは「りんごの食べ残り」をドイツの様々な地方のどの方言でどのように呼ばれているかという楽しいテーマについても考える²⁰⁾。

また、シックは *E-Mail for you* という章²¹⁾ で *e-mail* の書き方を記している。メールにおける乱れた書き方が多いと訴えて、シックは *e-mail* も普通の文と同じく、礼儀正しく正書法などで書くべきと強調している。

シックはこの2冊のいくつかの章の中で、直接ドイツ語の不正書法にはあまり言及しないが、

新正書法によって問題となった点に触れている。例をあげれば、コンマ・ハイフンや「ß」Eszettの使い方における混乱が取り上げられている²²⁾。

以下に、シックの本がなぜこれほどベストセラーになったか、そしてどこまで新正書法と関連性があるか、またこれらの問いの答えを見つけるために、まず新正書法が発効するまでの成り行き、その内容や結果について触れる。

ドイツ語の正書法について

ドイツ語の正書法は非常に複雑であり、難しいと言ってもいい。日本人が小学校の頃から、漢字の知識を習得していくのと同じように、ドイツ語圏の子供はドイツ語の複雑な言語規制を覚える必要がある。

具体的に言うと、どの音韻にどの文字を割り当てるかについての規制、外来語の書き方、分かち書き、大文字書き・小文字書き、句読法、分綴法などに関する様々な規制がある。ドイツ語を母語として使う人の中でも、参考書を引かずにそれを完全に正しく使える人は本来ほとんどいないだろう。教育・教養程度が高ければ高いほど、誤りが少なくなることは言うまでもないが、それらの規則を修得して、それに精通するには特別な言語感や語学の才能も必要であると考えられる。

このような状況を背景にして、ドイツ語の正書法は以前から論議の対象となっていた。時代の流れとともに、繰り返し変革や簡略化の提案が出されたが、徹底的な改革がようやく実行に移されたのは1996年からである。それまでの経過を簡略に述べたい。

1876年に、プロイセン政府はベルリンで、ドイツ語正書法において、より広い範囲での統一を目指そうとした会議を開いた後、公認の規定書が発行され、ドイツ全国で認められた。ドイツの言語学者Konrad Dudenコンラート・ドゥーデン(1829 - 1911)が編集した「正書法辞典」は1880年にプロイセンの公の正書法として基本となった。この辞典がドイツ帝国全体の基準となってから、オーストリアとスイスも同調した。その後、ドイツ語の正書法の発展や変更は全て、Duden編集部が行った。第2次世界大戦後も、その伝統はドイツとともに2つに分かれて、西ドイツのマンハイム(West-Duden)と東ドイツのライプツィヒ(Ost-Duden)で続けられた。1950年代から、西ドイツのいくつかの出版社はDudenの正書法と異なった書き方の単語をのせた辞典を出版することによって、Dudenの独占市場を破ろうとしたが、西ドイツの諸州の文化大臣はそれに反応し、1955年の決議によって、正書法に関する全ての疑問について、Dudenの規定を基本とすることを宣言した。Dudenは当時主流を占めていた言語の使い方を記録することを自らの使命としたが、次から次へと現れる言語上の疑問点を解決すると同時に、規則も増えたり複雑になったりする一方であった。

60年代末からの学生運動に伴って、正書法についての政治的な論議が引き起こされた。規格化された正書法は抑圧的である、そして教養ある人々と大衆の分離が生じるので、社会淘汰のために乱用される、と批判された。正書法を簡略化するために、改革提案が出された。書く能力を習得しやすくすることが目的であった。例えば戦後のデンマークと同様に、名詞の大文字書きを撤廃することが要求されたが、実験が行われた結果、名詞の小文字書きは読み取り速度

を減少させることが明らかになったので、その論議は立ち消えとなった。

正書法改革に向けて

ヨーロッパのレベルでは、1980年に国際正書法共同体 (Internationaler Arbeitskreis für Orthographie, 以下, IAOと略す) が創立されるとともに、改革協議が制度化された。参加者は東西ドイツ、オーストリアそしてスイスのドイツ語・ドイツ文学者であり、目的は学問的な方法でドイツ語正書法を検討することであった。1986年と1990年の二度にわたるウィーン会議には、住民の少数だけでもドイツ語を使う全ての国からの代表者が呼ばれて、予備会談が行われた。第一回の会議の結果として、改革に賛成する各国の国内レベルで専門家研究会が正書法改革案を仕上げるように依頼された。西ドイツのレベルでは1987年に、ドイツ文化相合同会議 (州文部大臣常設会議 Kultusministerkonferenz, 以下 KMK) はドイツのマンハイムにあるドイツ語研究所 (Institut für Deutsche Sprache) に正書法改革案を委託した。

ドイツでは1993年に、正書法案についての公聴会が行われ、48の協会・団体・機関が参加した。オーストリアやスイスでも同じく検討が行われた。IAOはヨーロッパ全体のレベルでそこであがった全ての抗議や懸念を考慮してから、それを新正書法の規定案に組み込んだ。この規定案は国家間のレベルでもドイツ各州のレベルでも、その後の協議の基準となった。

その時点からの経過を簡略に述べたい。正書法改革はドイツの16州の間の協定によるものだけでなく、ドイツ・オーストリア・スイス・イタリア・リヒテンシュタイン・ベルギー・ルーマニア・ハンガリーというヨーロッパ8カ国の間でも決められたものである。よって、正書法改革についての協議は非常に困難であった。IAOが繰り返し改革案を改訂し、最終的な案を発行するまでにはさらに3年を要した。

改革に関する検討は1996年初めまでに終了し、同年7月1日にウィーンでドイツ語圏諸国およびドイツ少数民族を抱える諸国により「ドイツ語正書法新規定のための共同意思表明」 (Gemeinsame Erklärung zur Neuregelung der deutschen Rechtschreibung) が調印された。これに基づいて1998年8月1日から新正書法が適用され、2005年7月31日までの移行期間内は新旧の正書法が認められていた。

新正書法導入による新規則の要点と問題点

では、新正書法による5つの領域の変更点を簡単な例をあげながら紹介しよう。変更によって生じる問題点も幾つか触れたい。

第1に、スイスでは既に廃止されたドイツ語独特の文字である Eszett (ß) にもかわりのある音声と文字の対応に関する変化がある。短母音の後は新しい規則では「ß」の代わりに全て「ss」と表記される。例えば、従属接続詞「daß」は「dass」になる。

また、合成語で同じ文字が3つ連続する場合、これまでのように文字をひとつ落とす必要はなくなった。例えば「バレエダンサー」は、これまで Ballettänzer と表記されたが、現在では Balletttänzer と記される。しかし t が3つも並べて書かれるのはあまりきれいではないという意

見もある。

「置く」という動詞はこれまで、その由来にかかわらず、plazierenと表記されていたが、これからはPlatz「場所」の派生語にしたがってplatzierenと書く。しかし例外もある。「両親」Elternの派生語は「年老いた」altという形容詞であるのに、Älternにならず、従来通りElternと表記される。

義務ではないが、外来語をドイツ語化して書くことも可能になった。例えばSpaghettiではなく、Spagettiと書いてもよい。しかし「財布」フランス語から由来したPortemonnaieがドイツ語に対応してPortmoneeと表記するという変更は行き過ぎと思う者もいるだろう。

第2に、新正書法は大文字書き・小文字書きの区別に関する矛盾をなくそうとした。例えば「朝」Morgenは名詞として大文字で書くべきなのに「今朝」はheute morgenと表記されたが、heute Morgenと書くようになった。

第3に、分かち書き・続け書きの区別に関する変更によって、合成語の分かち書きがこれまでよりも多くなる。例えば「知り合いになる」という動詞kennenlernenはkennen lernenになる。以前は「座ったままでいる」sitzen bleibenと（学校で）「落第する」sitzenbleibenという区別が可能であったが、現在は分かち書きしかないので、意味を文脈で理解する必要がある。

第4に、句読法に関して、書き手に裁量が与えられた。コンマに関する規則はかなり簡略化された。例えば語句と語句がundで結び付けられる場合に、コンマを書く必要がなくなった。

最後に、分綴法も簡略化された。分綴法（ハイフネーション）の目的は、そもそも読みやすさを損なわないようにしながら、語の配列を均等に保つことにある。手書きの文章において語を分綴することはほとんど避けられるので、問題にならない。実際に分綴を行うのは、多くの場合PCなどにインストールされているハイフネーションのソフトである。そのようなソフトは設定されたプログラムに従って分綴を行うので、自ら読みやすさを顧慮するということはない。例をあげれば、「海岸」ゼーウファーと発音するSeeuferはSeeu-ferとの分綴が出る可能性があるが、そのように読みにくくなったので、間違っただけでゼーオイファーと読んでしまう人がいるだろう。また「アザラシ」SeeelefantはSee-elefantのような分綴も生じる可能性がある。文章の中の行が、Seee-で終わるのはあまり美しくないという意見も出るだろう。しかし、このような簡略化によって分綴の可能性が増えたため、小学生が覚えるべき規則の負担が緩和された。従来、多くの決まりがあった。例えばckが出る場合に、k - kと分綴するというルールがあった。ZuckerはZuk-kerと分綴したが、新正書法ではもっと簡単にZu-ckerとなった。また単独の母音を分綴することも許される（例えばA-bend）。

このように、新正書法によって規定がだいぶ簡略化され、論理的になった²³⁾。しかしまた新しい、例外付きの規定も作られた。それも改めて、全て覚える必要があるので、新正書法は多くの問題点を含んでいる。

新正書法の結果

新正書法の発効は進捗したとは言えない。長い移行期間内から、異論が多数あった。学校の教師・学者や大学生は新正書法に反対する全国運動を促し、請願書を提出した。ニーダーザク

セン州の州政府首相 Christian Wulff のような、高い位置に立った政治家でさえも新正書法を疑問視し、その部分的取り消しを求めた²⁴⁾が、KMK はドイツ語新正書法を予定通り、2005年8月から発効させると、全会一致で決議した。

しかし、その束縛力には限界がある。ドイツ語正書法専門委員会 (Rat für deutsche Rechtschreibung) が一部変更を提出すると予想される部分について、2005年8月以降どうすべきかは、学校教師の裁量に任せられ、生徒がたとえ旧正書法を使ってもそれを誤りとはしないように、といている²⁵⁾。また、ノルトライン・ヴェストファーレン州とバイエルン州はこの改革法から距離を置いており、実施を見送った。両州の政府は今のところ、ドイツ正書法委員会が問題の部分のどうすべきかははっきりさせるまで待つ意向である²⁶⁾。

尚、多くの新聞や雑誌は新正書法を基礎にして発行されているが、それを適用せずに旧正書法に固執する新聞や雑誌は現在200ほど存在する。その内に Frankfurter Allgemeine Zeitung も挙げられる。いくつかの新聞社は新正書法でも旧正書法でもなく、独自の正書法を利用している。

また、出版社では、新正書法の実行は本のジャンルによって異なることがある。児童の本・教科書や実用書は多くの場合、新正書法に従うが、小説の場合は作家の希望に応えることがある。文学の名作の殆どは従来通り、旧正書法を基礎にして印刷されているが、教科書として使われている、Reclam社などが出版している古典名作は新正書法に従う。最近出版されている本の内の80%は新正書法に従うものであるが、多くの出版社は新正書法を全面的にではなく、部分的にしか利用していない²⁷⁾。このように、新聞社と同様に、出版社ごとにも独自の正書法ができあがった。

では、実際に新正書法の規模とその改革の文に及ぼす影響はどの程度のものだろうか。新正書法を支持している者は、旧正書法から新正書法への転換はそれほど処理しにくい問題ではないと強調している。統計上、文章の1頁には新正書法による変換は4%、まして ss/ß に関する規定を除けば、0.5%にしか及ばないとされている²⁸⁾。しかし、このような発言を聞くと、新正書法の必要性が疑わしくなるのではないだろうか。このような僅かの変換にこれだけの時間や金銭の浪費が適切であったかどうか、ということ疑問に思う。

尚、新正書法の目的は正書法の簡略化であったが、その改革によって新しい規則についてのかなりの当惑が表面化したとも言うべきであろう。しかし、新正書法発効後のメリットは、文を書く人にとっての選択の自由である。従来、ひとつの書き方しか可能でなかったが、現在いくつかの限定された場合について、様々な書き方が可能である。

むすび

ここでは、これ以上新正書法の意味や無意味について論じたり、それを評価したりするつもりはない。むしろ、シックの著作との関連を考慮したい。これほどその2冊の本の効果が上がったひとつの原因は確かに改革による当惑であると言えよう。しかし、他にも様々な原因が述べられる。新聞や雑誌では、「言語文化」 Sprachkultur というテーマには現実性がある、つまりドイツ語運用能力は目下の重要問題である、ということがしばしば言われている。その現実性は以前からあるのか、最近になって表面化したか、という問いにはまだ答えが見つけられていな

い状態であるが、シックの著作の成果は、言葉に対する意識が最近強化されたという結論に至らしめる。或いはその逆に、このような意識が強化されたからこそ、シックの著作は売れている、という結論も可能であろう。

他にもこの著作の成功について、いくつかの原因が挙げられる。現在の社会評論家や文化記事のジャーナリストは、ドイツのテレビにおけるレベルの低い娯楽番組に対する反発がある、という新しい傾向の存在を認めている²⁹⁾。インターネットやメールで使われている、スタイルの乱れた、誤りだらけのドイツ語に対する反発も登場している³⁰⁾。確かに、正書法改革と並んで、インターネットなどの速い普及も正書法上の「野生化」の大きな原因にもなっただろう。さらに、周知の宣伝・広告で、意図的に誤ったドイツ語が使われている。例えば、電話案内所の宣伝で、「そこで、あなたはたすけられる」Da werden Sie geholfen.と、誤った受動態文によって、有名な女性タレントの、文法に弱い、能無しのイメージが商品化されていた。勿論、多く人は、正しいドイツ語ではDa wird Ihnen geholfen.と、3格を使うべきことを承知しているが、このような誤りを正しいドイツ語と誤解する者もいるだろう³¹⁾。これらの、ドイツ語を崩壊に導くような状況を認めたくない人は、シックの著作を歓迎したにちがいない。シックはドイツ語の中の英語風慣用語に関する問題を広く取り上げているので、ドイツ人のドイツ語離れ³²⁾を非難する人も、その著作に同意すると思われる。

注

- 1) B. Sick (2005) 16頁。
- 2) B. Sick (2004) 13頁。
- 3) 相賀徹夫「独和大辞典」小学館1985年。
- 4) B. Sick (2004) 187 - 189頁。
- 5) B. Sick (2004) 166 - 167頁。
- 6) B. Sick (2005) 192 - 194頁。
- 7) B. Sick (2004) 52頁。
- 8) B. Sick (2004) 38頁。
- 9) B. Sick (2004) 47頁。
- 10) B. Sick (2004) 154 - 159頁。Anglizismus, Amerikanismusという。
- 11) B. Sick (2004) 146 - 147頁。
- 12) B. Sick (2004) 80 - 81頁。
- 13) B. Sick (2004) 43頁。
- 14) B. Sick (2004) 90 - 93頁。
- 15) B. Sick (2004) 139 - 141頁。
- 16) B. Sick (2004) 135頁。
- 17) B. Sick (2004) 119頁。
- 18) B. Sick (2005) 100頁。
- 19) B. Sick (2005) 187頁。
- 20) B. Sick (2005) 170 - 175頁。芯と軸が繋がっているりんごの細長い「食べかす」。ドイツではりんごをナイフで切りわけのより、そのままかじって食べる人が多い。
- 21) B. Sick (2005) 230 - 247頁。
- 22) B. Sick (2005) 50頁, 71頁, 113頁。

- 23) 新正書法改革によって、正書法における規則は212件から112件に減らされた。コンマに関する規則は52件から9件に減らされた。
http://www.journalismusausbildung.de/rechtschreibung_geschichte.htm, Lisa Walgenbach: Die neue Rechtschreibung. 4頁 (2005年11月28日)。
- 24) Saarbrücker Zeitung, 2005年4月9日。
- 25) Deutsche Welle, 2005年6月2日。
- 26) Deutsche Welle, 2005年8月1日。
- 27) http://de.wikipedia.org/wiki/Reform_der_deutschen_Rechtschreibung_von_1996, 6頁 (2005年11月17日)。
- 28) http://www.journalismusausbildung.de/rechtschreibung_geschichte.htm, Lisa Walgenbach: Die neue Rechtschreibung. 4頁 (2005年11月28日)。
- 29) B. Sick (2005) 15頁。
- 30) B. Sick (2005) 230 - 247頁。
- 31) B. Sick (2005) 145頁。
- 32) http://www.vds-ev.de/denglisch/anglizismen/anglizismenliste_texte_sprachloyalitaet.php, Heinz-Günter Schmitz: Über die Sprachloyalität der Deutschen (2005年4月26日)。